蚊帳雜載

ラ近江産ノ疊表蚊帳ノ類ヲ賣ル店也、此店ヨリ手代ヲ賣人ニ市街ヲ巡ラシム、幟ハ雇夫ヲ以テ擔之也、其扮圖○圖略ノ如ク、二人ノ菅笠雇夫ノ半天、及蚊帳ヲ納ル紙張ノ籠トモニ、必ズ新製ヲ用フ、又此雇ニハ、專ラ美聲ノ者ヲ擇ブ、雇夫數日習之テ後ニ爲之賣詞萌黃ノカヤア、僅ノ短語ヲ一唱スルノ間ニ、大略半町ヲ緩歩ス、聲長ク呼フコト如此也、

小蚊屋賣　前ニ云蚊屋賣ハ大賣ヨリ出之、大約路上呼巡ル、賣人皆小民ノミ、唯カヤウリノミ大中賣ヨリ出之亦此小蚊ヤウリハ、小民ノ業トス、賣詞ニ桃ガヤ母衣蚊ヤ、二幡トモ小兒ヲ欺シム ノ具、竹骨ヲ覆フ物也、

〔時慶卿記〕慶長十年四月廿八日天晴、暑、又時々風涼、綾蚊帳ノ祝、白酒餅到來、此方ニ初、

〔松屋筆記 百九〕蚊を白鳥といふ、もえぎのかや、

珍珠船四卷十七丁左云、白鳥蚊也齊桓公臥箱寢謂仲父曰、一物失所、寡人悒々、今白鳥營々是必飢耳、因開翠紗厨進之云々、按白鳥ハ蚊の異名也、翠紗厨ハ今のモヱギノ蚊屋の類といふべし、

〔武雜記〕二蚊張のおもしにはくるがねをほそく折でも被置候、是にて人を抑擲する事の古事有之由申ならひ候也、

〔骨董集 上編 中〕宗祇の蚊帳

今俗に見えをいふといふたぐひ虛言して自誇事を、百七八十年前の諺に宗祇の蚊帳といひたるよし、宗祇法師とおなじ蚊帳に寐たりと、虛言して誇し者ありしより、世の諺になりしとなん、

〔柳亭記 三〕宗祇の蚊屋（中略）此段骨董集に見えたるを補ふ

昔連歌師の自誇りて我は宗祇の蚊屋に三年寐たりといひしが二種の諺となり、今俗に見えをいふといふ程の事を、宗祇の蚊屋といひつる事は、骨董集に見えたり、又西鶴が名ごりの友に、宗祇法師と岡部の宿にて相宿して、同じ蚊屋に寢たりといひし商人の話を載たるは、三年といふ